



菅生学園初等学校だより

2021年度1月号
校長室だより

「どんな寅年になるのか・・・」

明けましておめでとうございます。恙なく新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。今年は^{みずのえとら}壬寅の年だそうです。「壬」という文字は、春の萌芽を内に秘めつつ春を待つ厳しい冬の状態を意味するようです。生命の息吹が噴き出す春を待ちわびている状態といえます。さらに、九星と重ねて「五黄（ごおう）の寅」（音を縮めて「ごうのとら」）年と呼ばれる36年に一度の「最強の寅年」といわれています。また、虎は黄金の毛皮をまとっているように見えることから、「最強金運」の年などという人も



円山応挙 画（江戸時代中期）

いるようです。宝くじ売り場で目にする「本日寅の日」なる看板の意味がようやく理解できました。

さて「虎」といえば、日本には生息していません。インド・中国からイメージだけが輸入された生き物でした。実物を見たことのない絵師の筆で描かれた虎の絵は、どことなく違和感があります。（左図参照）天皇に献上されたり、豊臣秀吉などが手に入れたこともあったとのことですが、一般庶民が実物を目にできるのは幕末の頃が初めてだったようで

す。紫式部日記（1008～1010年）によれば、「虎の頭（とのかしら）に模した作り物を煮るまねをした湯で産湯を使わせると、子供の邪気を払い生涯無病に育つ」といった内容の記載があって、古くからすでに虎が「厄よけ」や「丈夫」につながる縁起物とされていた節もあります。

歴史上、寅年生まれ的人物を調べてみると興味深い人々が挙げられます。上杉謙信、徳川家康、吉田松陰など、世に様々な影響を与えた人物です。共通項は、「周囲を圧倒するカリスマ性と最強の運気を持っていて、強いリーダーシップを発揮するが、プライドが高く信念を曲げないタイプ」といったところでしょうか。「越後の虎」と呼ばれた上杉謙信は戦上手で知られ、領国の拡大を目論むよりは「義」を大切に戦った武将です。徳川家康は数々の修羅場を生き抜き、江戸幕藩体制を築き上げた人物。吉田松陰は明治維新を成し遂げた人物に思想的影響を強烈に与えました。どの人物も「孤高の虎」のイメージに重なる人生です。だからこそ、今も人々の気持ちを高揚させる人物たちなのかもしれません。

また興味深いことに、四方の守護神の中にも虎が出てきます。東の青竜・西の白虎・南の朱雀・北の玄武です。江戸の町を風水思想で築いた徳川家康は、四神を江戸城中心に配置。江戸城から見て寅の方角（東北東）ではなく、白虎の方角（西）に虎ノ門を作っています。四神の中で、実在する生き物は虎だけ、虎は神々さを兼ね備えた生き物として実在する特別な存在ということなのかもしれません。

前回の「五黄の寅」の年は1986年、バブル時代の出発の年ともいわれています。私はまだ銀行員として上野支店で中小企業相手に地盤担当の営業をしておりました。1985年のプラザ合意後の円高不況、低金利政策からバブル景気への流れを思い出します。今年はその時のような景気吹き上がりの始点となるのか、少し楽しみな年明けです。みなさまにとって幸多き一年でありますように・・・

今年もよろしく願い申し上げます。

Down with covid19!